

令和元年5月12日現在

機関番号：20104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03848

研究課題名(和文)離婚・再婚家庭への世代間支援：「多世代の紐帯」としての祖父母に関する実証的研究

研究課題名(英文)Intergenerational Support and the Role of Grandparents in Post-Divorce Families

研究代表者

小野寺 理佳 (ONODERA, Rika)

名寄市立大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：80185660

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、未成年の子どものいる夫婦の離婚や再婚に関わる「多世代の紐帯」としての祖父母の働きを明らかにすることを課題としている。国内とスウェーデンにおいて調査研究を行った結果、わが国の祖父母は、単独親権制度のもとで親権者の親として自身に連なる子どもと孫だけを丸抱えで支援する傾向があるのに対して、スウェーデンの祖父母は、孫の親の新・旧パートナーとの関係を維持しながらストレスフルな状況にある孫の居場所・拠り所ともなり、孫がその両親や新しく親のパートナーとなった人々と良好な関係を維持できるように協力し、新しく自分の孫となった者とも親しい関係を築いていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スウェーデンのように共同親権の選択が増えつつあるところでは、祖父母は「交替居住」する孫や共同監護する孫の両親のために新たなネットワークの創造を担う重要な立場にある。わが国においても親の離婚や再婚を経験する子どもが増え、祖父母にこうした役目を主体的に果たすことが求められるようになる可能性は十分にある。本研究の成果は、「子どもの最善の利益」という点からの「祖父母という存在」のとらえなおしを進め、親の離婚や再婚を経験した子どもへの社会的支援の充実や、わが国における共同親権をめぐる議論の深化に貢献するという社会的意義をもつものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine intergenerational support and the role of grandparents in post-divorce families. In Japan and Sweden, the survey was conducted through face-to-face interviews of divorced/remarried couples and their parents (grandparents). Japan maintains a system of sole custody and grandparents tend to support grandchildren as parents of parents with custody. In the other hand, in Sweden, many couples choose joint custody, so intergenerational relationships are more diverse and complex. Grandparents in Sweden maintain relationships with partner and ex-partner of their children and provide a place where stressful grandchildren can rest. And they help their grandchildren maintain close relationships with their parents and with new family. Grandparents play an important role in establishing a new network for grandchildren and their parents, especially when joint custody is selected.

研究分野：家族社会学

キーワード：世代間関係 祖父母 世代間支援

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

少子化、長寿化等によって、祖父母世代が、自分の子である親世代の家庭に対して長期的に密な関わりをもつ機会が増えている。祖父母世代によるインフォーマルな支援が求められるひとつの場面として、未成年の子どものいる親の離婚や再婚がある。しかし、その際に祖父母世代がいかなる支援者であるかについての研究は、欧米においては蓄積があるが、わが国ではほとんどみられないのが実状である。そこで、研究代表者は、子連れ再婚によって形成されるステップファミリーに着目し、そこにおける世代間関係についての調査研究を行ってきた。その結果、祖父母世代は、未成年の孫世代に対し、時には血縁や姻縁を超えて主体的・選好的に交流や支援を行っており、祖父母を紐帯とする多様な多世代関係が形成されていることが明らかとなった。わが国は家族に血の繋がりを求める価値観が強いといわれるが、それとは異なる繋がりが見いだされた。また、特に結婚や離婚が繰り返され家族関係が複雑化するとき、血縁の有無(実祖父母・ステップ祖父母)にかかわらず、祖父母世代との繋がりが、孫世代だけでなく親世代にとっても拠り所となることが示唆された。

以上のことから、未成年の子どものいる夫婦の離婚や再婚に関わって、祖父母世代の「多世代の紐帯」としての働きが支援となり得ることは明らかであり、次の課題として、「多世代の紐帯」としての働きが、どのような状況において、どのように実現されているのか(いないのか)、実現され得るのかを詳細にとらえることが浮かび上がった。その際、祖父母世代の主体性・選好性に注目し、外国ではどうなのか、都市部と地方といった生活圏・生活環境の違いはどう影響するのか、という視角からの検討も重要であると考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、「未成年の子ども(孫世代)のいる夫婦(親世代)の離婚や再婚」による家族関係の変化に関わって、祖父母世代が多世代を繋ぐ働き(多世代の紐帯)を果たすことにより、親世代・孫世代への支援となり得ることを、祖父母世代の主体性・選好性に注目、日本とスウェーデンの比較、都市部と地方の比較、という3点から明らかにすることである。

祖父母世代の主体性・選好性に注目した理由は、現代の世代間関係とは主体的・選好的に営まれるものとも見ることができるところからである。各世代が「個」としていかに選択的に交流や支援を行い、いかに選択的に世代間関係を築いているのかを具体的にとらえようとした。次に、日本とスウェーデンの比較を行うことにした理由は、家族の多様化の進行と家族政策の違いが、家族関係の複雑化のありようと、そこへの祖父母世代の関わり方にいかなる影響を与えているのかをとらえるためである。スウェーデンは個人単位社会であり、結果として、多様なライフスタイルが容認されている。わが国に比べて離婚や再婚が多く、シングルペアレント、ステップファミリーも一般的である。離婚後も、両親ともに親権をもつ共同親権・共同監護が選択される傾向が相対的に高く、多くの子どもは別れた両親のもとを行き来しながら生活する(これを「交替居住」という)。このような状況における家族観、親子観、家族規範等を日本と比較しながら、「多世代の紐帯」としての祖父母世代の働きの意味を両国間で比較検討することにした。最後に、都市部と地方との比較が必要と考えた理由は、都市部と地方とでは、家族の実態が異なり、人々の働き方等のライフスタイルや地域の人々との繋がりが、受けられる社会的な支援の内容も異なると考えたからである。調査地として、都市部と地方の二地域を選定して調査研究を行うことにした。

これらの調査研究を通して、祖父母世代の日本的特質をより鮮明に示すことができ、これまで研究代表者が取り組んできた研究の成果を活用することで、わが国の世代間関係の特徴と課題をより正確にとらえることができると考えられた。そして、祖父母含めての多世代関係という視点から子どもの養育環境を見直すことにより、親の離婚や再婚を経験した子どものために必要な社会的支援を導き出すことに貢献できると考えられた。

### 3. 研究の方法

本研究では、目的達成のために2つの調査研究を計画した。1つは、「多世代の紐帯」としての祖父母世代の日本的特質に関する実証的研究であり、もう1つは、スウェーデンにおける「多世代の紐帯」としての祖父母世代に関する実証的研究である。いずれも都市部と地方の二地域を選定し、「多世代の紐帯」としての祖父母世代が主体的・選好的に世代間関係を営んでいることを探ることをめざした。

(1)「多世代の紐帯」としての祖父母世代の日本的特質に関する実証的研究では、まず、「未成年の子ども(孫世代)のいる状況で離婚や再婚をし、現在、未成年の子どもを育てている親世代」に着目し、その親子にとって祖父母世代が多世代を繋ぐ存在たり得ているのかを、聴き取り調査により探ることとした。離婚・再婚が繰り返されているケースに特に注目することにした。祖父母世代も調査対象とし、家族関係の変化のありようを明らかにし、祖父母世代がどの場面にもどのように関わり、それはどのように意図的・選択的であり、それを両世代がどのように認識し、意味づけているのかを解明しようとした。また、当該の状況を体験した三つの世代から広く調査への協力を得て、これまでの家族関係の変化の様相と祖父母世代の選択的な関わりについて振り返って語ってもらうことを計画した。この聴き取り調査においても、離婚・再婚が繰り返されているケースに特に注目することとした。そのうえで、各世代について、多様な条件(経済的条件、教育歴、職業等)やジェンダーに即して分析を行い、都市部と地方の

比較検討を行うことにより、「多世代の紐帯」が実現されている状況・実現され得る条件を確認し、「多世代の紐帯」としての祖父母世代の日本の特質を解明することをめざした。

その後、調査研究を実施するにあたり、離婚・再婚という極めてプライベートな事情を条件とする対象者紹介を保育機関に一定数依頼することが困難であることが明らかになったため、当初の計画を変更し、都市部においてボランティア募集雑誌に広告を掲載し調査協力者を募る方法を採用した。応募条件は、自身の離婚や再婚によって子どもと祖父母の関係に変化があった者（親世代）、娘または息子の離婚や再婚によって孫との関係に変化があった者（祖父母世代）、親の離婚や再婚によって祖父母との関係に変化があった者（孫世代）とした。

(2)スウェーデンにおける「多世代の紐帯」としての祖父母世代に関する実証的研究でも、都市部と地方の二地域を選定し、上記と同様の調査を行うこととした。都市部と地方を比較しながら日本との比較検討を行い、共通点・相違点が意味するものは何か、要因は何かを解明することをめざした。そして、それらの結果を分析することから、「多世代の紐帯」としての祖父母世代の日本の特質をより明確にとらえ、わが国の世代間関係の特徴と課題が抽出できると考えられた。

スウェーデン調査研究においても、計画の一部を変更して実施した。1年目はストックホルム市調査、2年目はエステルズンド市調査を予定していたが、関係各所との交渉・調整の結果、両年ともストックホルム市およびエステルズンド市の両地域において調査を実施することになった。調査内容についても、学校調査は機会を改めることとし、祖父母世代と、家族福祉および地域福祉に関わる公的機関職員への聴き取りを集中的に行うこととした。祖父母の調査対象者の条件は「子ども（祖父母からみた孫）をもつ子世代の離婚や再婚を経験した祖父母世代」とし、調査対象者を探すにあたっては、現地の協力者による紹介を経て依頼を行なった。また、家族福祉および地域福祉に関わるスタッフとは、具体的には、社会福祉サービス部門の職員（離婚家庭に実際に関わる社会福祉士、親の離婚を経験した子どものためのサポートプロジェクト職員、家族関係のコンサルタント、高齢化した祖父母世代が入居する高齢者特別住居のスタッフ等）である。この他、ファミリーセラピーを行なう民間機関のコーディネーター、当該領域の研究者（ストックホルム市の児童・青少年センタースタッフとストックホルム大学で児童心理や家族問題を研究する研究者）にも聴き取りを行なうこととした。

#### 4. 研究成果

(1)「多世代の紐帯」としての祖父母世代の日本の特質に関する実証的研究では、聴き取りの結果、先行研究で指摘されてきたように、祖父母による支援（とりわけ経済的支援）の多寡が離婚を経験した親子（祖父母から見た子どもと孫）の生活の安定や再建に大きく貢献していることが確認され、祖父母世代の関心と支援を十分に得ることができない人々との間に格差が生じていることが明らかとなった。また、祖父母が親族のなかで中心的な役割を果たしている場合にそのネットワークの存在が親と孫にとっての大きな支援となっているケースや、祖父母と孫がともにする時間が僅かであっても、祖父母の家が孫にとって特別の場所であり続けているケース等があり、紐帯としての祖父母のありようは多様であることが示された。その際、祖父母、親、孫それぞれの立場によって、世代間関係についての評価や規範が異なることも明らかになった。即ち、離婚や再婚を経た後も、親にとっては元配偶者の実親、孫にとっては別居する実親側の祖父母といった人々との関係が断続的に維持されている場合も少なからず見受けられ、親や孫の世代にとっては、祖父母世代とはこうした複雑な繋がりの中に位置づけられる存在であった。一方、祖父母に焦点を合わせるなら、基本的に、彼らは、単独親権制度のもとで親権を得た親側の祖父母として自身に連なる子どもと孫だけを丸抱えで支援し、その支援のなかで特定の孫との親密な関係を享受しようとする傾向が強いことが示された。このように、世代間の支援関係は、世代間の認識の違いや葛藤を含みながら営まれていることが確認された。

(2)スウェーデンにおける「多世代の紐帯」としての祖父母世代に関する実証的研究では、聴き取りの結果、祖父母世代は子どもをもつ親世代の離婚・再婚を、孫のネットワークが拡がり、孫にとっての資源が増える契機として前向きに捉えようとしており、そのために、ミーティング・ポイント、つまり多世代の人々を結びつける出会いの場としての働きを成そうとしていることが明らかになった。孫の親カップルのパートナー関係が解消された場合、一般に、祖父母の子ども元パートナーと祖父母との交流は縮小されていっても不思議ではない。しかし、祖父母にとって、子どもの元パートナーや元パートナーの親（孫のもう一方の祖父母）とも、機会があれば、また必要に応じて交流が維持されることは当然のことと考えられていた。祖父母は、孫とその離別した両親が祖父母のところで一緒にクリスマスを過ごせるようにセッティングするなど、孫が両親とよい関係を維持する機会や場所を積極的に提供しており、また、子どもの元パートナーを祖父母宅に招く・会う・カードを送り合う・電話で話す、子どもの元パートナーと現在のパートナーが祖父母宅で会う機会をつくるなど、離別後の元パートナーとも積極的に交流を続けていた。いずれの場合も、それらの交流が土台となって孫がより豊かな家族関係を得ることができると考えられていた。交替居住のための支援もこうした考えによるものといえる。

祖父母世代と親世代は、互いに生活上の自立を果たしたところで対等な関係を育てており、祖父母は親世代の人生には干渉せず、その人生の選択の結果（離婚や再婚）を受けとめたうえで、孫の幸福のための働きを成そうとしていた。その基盤には、自立を可能にする家族福祉サ

ービスの充実と世代間コミュニケーションへの絶えざる努力があった。つまり「自立を基盤とする多世代の紐帯」であることが示されたといえる。「福祉サービスの充実があるから自立でき、自立があるからこそ家族関係を選好的に築くことができる」という聴き取り対象者の言葉が示すように、祖父母世代は、自立を基盤として、多世代の紐帯としての働きを成しているが、しかし、同時に、彼らが自身の生活史と比較して現代社会における結婚や家族について語るとき、家族主義的なメンタリティやそうした家族のあり方への郷愁の言葉も聞かれ、その点においては、日本の祖父母世代と共通するところも認められた。このように多世代の紐帯としての務めは、家族に関わる認識の違いや葛藤を含みながら営まれていた。

さらに、この調査結果をふまえて、3. で示した社会福祉サービスに携わる多様な職員や研究者の意見・認識をとらえるための聴き取りを行なった結果、親の離婚や再婚により子どもはより豊かなネットワークを得ることができるとい認識が社会で共有されていること、祖父母による世代間支援については、祖父母自身の就労と自立、生活水準、親世代に干渉しない抑制的な態度が求められる社会であること等が影響しており、福祉が担う範囲が広がっていること、「交替居住」について肯定的な評価が多い一方で、「交替居住」に伴うストレスに苦しむ子どもの存在があり、その子どもを対象とするサポートプログラムの実施が拡がりつつあるなかで、祖父母世代がそこに関われる可能性もあることが確認された。また、祖父母世代が仕事をして自立して生きることと自分の関心を優先させて暮らしてきた結果として、老後の施設での生活において世代間関係の希薄さを後悔する場合もあることが高齢者特別住居の施設長から語られ、多世代の紐帯としての働きを成す背景には、スウェーデンの高福祉社会における高齢者の孤独や孤立の問題も関わっていることが示唆された。高齢者は、その子世代にとっては「別の家族」、つまり、子世代の家族としては認識されないことが多い以上、世代間関係においてこのような働きを成すことは、祖父母世代が若い世代との親密な関係を強化して孤立や孤独に陥らないためのひとつの方策であり、その意味で、戦略ともなっていると推察される。

以上、国内調査とスウェーデン調査から得られたデータの整理・分析を行った結果、祖父母世代が多世代の紐帯としての働きを主体的・選好的に成していることを明らかにすることができた。特にスウェーデンのように共同親権の選択が増えつつあるところでは、祖父母世代は「交替居住」する孫や共同監護する孫の両親のために新たなネットワークの創造を担う重要な立場にあった。少なくとも、聴き取り対象者の祖父母たちは、この新しいネットワークを大きな「家族」として認識していた。こうした姿は日本の祖父母世代とは大いに異なるものといえよう。この研究成果は、「子どもの最善の利益」という点からの「祖父母という存在」のとらえなおしを進めるとともに、親の離婚や再婚を経験した子どもへの社会的支援の充実に繋がる。また、近年、子どもの利益・子どもの権利が個人的、社会的、法的な関心事項となり、共同親権や共同監護の議論が進んできた状況において、わが国における共同親権・共同監護をめぐる議論の深化に貢献できるものと考えられる。

なお、研究の目的に掲げた3点のうち、祖父母世代の主体性・選好性に注目、日本とスウェーデンの比較、という2点については達成することができたが、都市部と地方の比較という点に関しては、その違いを明確な形で抽出するには至らなかった。さらに分析を進めたい。また、スウェーデン調査では、調査設営上の事情により祖父母世代を対象とする調査に集中したため、孫世代を対象とする調査については取り組むことができなかった。次の研究課題としては、孫世代に着目し、孫が世代間支援をめぐる祖父母・孫関係をいかに主体的・選好的に築こうとしてきたのかを解明することが求められる。2019年度に採択された研究課題『「交替居住する孫」から見た世代間支援：現代社会における祖父母・孫関係に関する研究』において、日本とスウェーデンにおける調査研究を引き続き行い、この問題に取り組む予定である。

## 5. 主な発表論文等

調査研究の成果を報告書『「多世代の紐帯」としての祖父母世代-スウェーデンにおける離婚・再婚家庭に関する調査から-』2018年(120p.)としてまとめ、以下の3本を収めた。下記サポートプロジェクトに関する資料の翻訳版(p.93-109)も添付した。この報告書は、所属機関のリポジトリに登録予定である。

小野寺理佳「ミーティング・ポイント」としての祖父母世代-スウェーデンにおける世代間関係調査から-」p.5-43

梶井祥子『スウェーデン・モデル』と家族規範の変容-家族の自律性はどのように支援されているのか-」p.45-70

小野寺理佳「親の離婚を経験した子どものための支援-スウェーデン・エステルスンドコミュニティにおけるサポートプロジェクト Bubblan-」p.71-89

〔図書〕(計1件)

(1)【分担執筆】小野寺理佳、「祖父母という存在」、日本家政学会家族関係学部会(編)『現代家族を読み解く12章』、丸善出版、2018:124-25

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：梶井祥子

ローマ字氏名：(KAJII, Shoko)

所属研究機関名：札幌大谷大学

部局名：社会学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 90369249

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。